

私は40数年前、熊本で大学生活を送っている時、あるふしぎなことばに出会いました。初期アメリカの思想家、ラルフ・エマソンのことばです。おそらく最初は日本語で読んだのですが、いつの間にかオリジナルの英語で暗記していたのだと思います。だから今から4年前、ニューヨーク・コンサートの翌朝、宿泊していたホテルの枕元にあるラジオをかけ、そこから響いてくるのを聞いた時、まるで初恋の人に出会ったような懐かしさを覚えました。

Hitch thy wagon to the star.  
汝の馬車を かの星につなげ

ラジオの向こうでは、なにやら説教家がさかんに喋っていましたが、私はこの一句を聞くだけで充分でした。涙が流れてきた。

あの若い頃、何も分からないまま、宇宙の彼方に向かって祈りました。「一生かかっても、聖なるものに出会いたい、聖なるものになりたい」と。私は、自分が何を具体的に願っているのかわかりませんでした。ただ自分の深いところからわきあがってくる祈りを、空に向かって祈ったのです。

「馬車」とは、魂の深い願いを指します。エマソンがどういう意味で言ったのか、今はもう覚えていませんが、少なくとも私はそう受け取りました。祈りが深ければふかいほど、魂の聖なる願いであればあるほど、それはかならず返ってくる。神のハートを通過して返ってくる、何倍にも何十倍にもエコーして返ってくる。そして、なんと美しく響くことだろう。

私はいつのまにか、確信するものがありました。「宇宙には、叫べば、かならず返ってくる愛がある」と。

若い頃の祈りが、今こんな形で返ってくるとは、ほんとうに想像もしていませんでした。私は自分の祈りが、今芦屋の浜に出来つつある風の教会を呼び寄せたとは思っていません。ほんとうです。風の教会は、美津子さんが祈ったから、ピーターが願ったから、たくさんの方が努力したから、出来るものではありません。ほんとうです。しかし、若い頃のピーターのハートに、「その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるどころ」(ピリピ 2:13)であったとは、ことばのいちばん謙虚な意味で、信じています。

釣りをしていた美津子さんが振り向けば、中空にクリスマスの星が出現した。彼女も又、風の教会が「神のよしとされるどころ」であるというしるしを見たのです。

風の教会は、主の「至聖所」として現れつつある。私が知らずに祈っていた「聖なるもの」とは、至聖所なる風の教会だったのです。

見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。(マタイ2:9-10)

はるか彼方から星のしるしに導かれ、信じられないような困難な旅をしてきた東方の博士たち。ベツレヘムの御子を拝した瞬間、かれらには、もう一点の迷いもなかった。

私も、もうなんの迷いもない。風の教会は、主をお迎えする至聖所なのです。ここで主を、霊とまことをもって拝する。そして、クリスマスの御子は、風の教会より、全地に愛といやしを送られる。

白いハトに託された主の願いがなる時が来た。

クリスマスが来ました。私が主に出会ったのが1987年12月3日(白いハトの日)でしたから、今年は主に出会って丸20年、クリスマスは21回目を迎えます。最初のクリスマスはアメリカ、ニュージャージー州のフォートリーという町でした。

白いハトの日はクリスマスに近い時だったので、街はクリスマスの飾りがはなやかでした。特に私が住んでいたエラリー通りは最もハデな飾りであふれ、夜は家の前に光のトナカイやサンタクロースたち、雪だるまの人形(もちろんプラスチック製で中にライトがしかけてあるもの)などの飾りが所狭しと立っていました。木々や家の窓という窓には点灯するライトがつけました。

主に出会ったのはアメリカ生活6年目でしたから、それまで5回のクリスマスには、これらのハデな飾りを見て楽しんでいたのですが、主に出会ってからは見方が変わりました。「なんとドハデなイルミネーションをするのかしら。アメリカ人はこういうのが好きなんだろう」というのがそれまでの感想。主に出会ってからは、「こんなにも目一杯主のお誕生のよろこびを現しているんだ」ハデさには変わりはないのに、よろこびを共にしている自分にびっくりしました。

家々の飾りはすごいものでしたが、クリスマスの日はとても静かでした。私たちの大家さんとはいうと、朝から着飾って家族で礼拝に出かけ、あとは家で静かにクリスマスを祝っていました。

私は、最初のクリスマス、今は「主に出会った」と言っていますが、当時は何と出会ったのかもわからず、ただやみくもにうれしい思いでいっぱいでした。まだ疑いも、知性の反発も何も無い時です(キリストとの出会いであるということを知り、信仰の確信を持つためにはいったん疑いや知性の反発を通らなければならないのでしょう)。それまでの人生では知ることのなかったよろこびでした。

最初のクリスマスで忘れられないことが二つあります。

街に出ると、店々で「きよしこの夜」の歌が流れています。それまできれいだなーくらいの聞き方しかしていなかったのに、この時は心がぐっとつかまれたようになって涙がこぼれるのです。突然涙があふれて困りました。何とも言えないよろこびでいっぱいの時の涙でした。

もう一つはあるユダヤ人の弁護士さん夫婦にディナーに呼ばれた時のことです。一切キリストの話はしていないのに、「ミツコ、あなたはキリストか」と食事の席で突然に問われたこと、しかも三度も問われ、私は三度とも「ノー」と答えてしまいました。

ほんとにまだ分かっていなかったからですが、それでもノーと言うたびに胸に刺すような痛みを覚えました。これもものすごいよろこびの中でのことでした。

あとで、キリスト・イエスさまとの出会いを確信した時、私はこの痛みを思い出し、これから先、決してこの最初のクリスマスの痛みを忘れないと思いました。

主と出会い、私の霊はよろこびにあふれ、よろこびしかなかった。「きよしこの夜」のさんびに、私の霊はよろこび、主のお誕生を心から感謝していたのでしょう。しかし、そのよろこびの中で、私には肉の反発がある。肉はキリストを否定し、霊を痛ませてしまう。しかし私の霊も肉も知っているのです。ほんとうのよろこびは、主を知るところにしかない。

主を知る。主に出会う。出会いつづける。これが私のクリスマスです。

私の内に御子がお生まれになった時だからです。

全地が御子のお誕生をよろこびます。メリー・クリスマス！